

# UDON

2006(平成18)年8月3日鑑賞<東宝試写室>



監督=本広克行/出演=ユースケ・サンタマリア/小西真奈美/木場勝己/鈴木京香/トータス松本/升毅/片桐仁/要潤/小日向文世 (東宝配給/2006年日本映画/134分)

……今ドキなぜさぬきうどんがテーマ、と思わないでもないが、さぬきうどんブームは一過性であっても、その本質は奥深いものと理解できれば、この映画の「感動」が伝わってくるはず！「たかが、うどん」「マンガみたいなコメディ映画」と侮ることなかれ！さぬきうどんが織りなすさまざまな笑いの奥にある、父と息子の葛藤や男と女のラブロマンス、そして人間の生きざまそのものについて、あなたも考えさせられ、感動を受けること確実……。

## 第4章

### 映画で社会参加

#### 映画で町おこし……

7月24日付産経新聞夕刊の一面には「邦画復活後押し」「地方パワー」の見出しが躍った。『UDON』のロケ地はもちろん香川県だが、香川県高松市庵治町のロケ地は『世界の中心で、愛をさけぶ』(04年)の大ヒットで一躍観光名所となった。そんな香川では「映画で町おこし」をかけ声に、県観光協会が主体となり、2001年4月フィルムコミッションが発足した。これは映画、テレビなどのロケーションを誘致し、実際の撮影をスムーズに進めるための非営利公的機関。このフィルムコミッションの力を借りて、香川ロケをする映画が相次ぎ、何とこの『UDON』でその本数は11本！香川県といえば何ととっても讃岐うどん。したがって、「花(世界の中心で、愛をさけぶ)より団子(UDON)」とばかりに、この第11作目がフィルムコミッションの決定版となること確実……。ちなみに、8月5日から全国公開される『釣りバカ日誌』には、全国ゆかりの釣り名所が登場するが、今回の第19作目は石川県の能登半島や兼六園。さて、この地方ロケ合戦での、香川県 VS 石川県の勝負やいかに……？

## 私とうどん……

私は愛媛県松山市の生まれだが、ここに私が小学校の低学年の時から今までずっと通っている「鍋焼きうどん」の店、旭<sup>あさひ</sup>がある。これは松山の実家から歩いて3分くらいのところにあり、小学生の頃から何かあれば必ずここで食べていたもので、そのおいしさは松山中で評判の店。今は2代目が跡を継いでいるが、昨年12月、愛媛大学での都市法政策の集中講義のために松山に戻った時を含めて、私は松山に戻れば必ずここで鍋焼きうどんを食べている。何よりも感動するのは、その味が小学生の頃と全く変わらないこと。

そんな私は今でも大のうどん好きで、最近は日曜日毎に行くフィットネスクラブでの運動の後は、難波にある某うどん店で210円のきざみうどんを食べるのが習慣。また、事務所の近く、南森町駅にある立ち食いうどん「丸天家」と、天六の映画館ホクテンザの近くにある、大きな「けつね」が名物の立ち食いうどん店も私の行きつけ。全国的には香川県にうどんの愛好者が多いが、松山生まれの私だって、うどん好きでは決して負けていないとの自負心が……。

## 讃岐うどんの食べ方は……？

私は高松駅構内のうどん屋で食べたことは何回もあるが、本場讃岐のうどん屋で讃岐うどんを食べたことは数えるほどしかない。面白いのはセルフの店で、はじめてそこに行った人は戸惑うはず……。もっとも、この映画が描くように、讃岐うどんブームが起こったため、今では私の事務所の近くにも1杯100円の讃岐うどん店が登場しているが、本場のセルフに近いスタイルとはいっても、やはり本場の味や雰囲気には遠く及ばないもの。また、100円といってもこれは小盛りだし、いろいろとトッピングをすれば300～400円近くになるから、やはり立ち食いうどんのおいしい店の方が安い……。

ちなみに、大阪では何といってもきつね（けつね）うどんが名物だが、讃岐うどんの本命は何といっても「釜あげうどん」。いろいろとトッピングをするのは邪道で、この映画にあるように、本来はダシとネギもしくはしょうゆと玉子とネギだけで食べるべきもの。また、うどんは1杯だけ、などと思ったら大まちがい

で、2杯、3杯と食べるのは当たり前……。そんな讃岐うどん本来の味わい方がこの映画によって全国発信されれば、再度讃岐うどんブームが訪れるかも……？

## うどんを軸とした多種多様なテーマが……

タイトルが『UDON』、主演がユースケ・サンタマリアと聞き、最初は例によって(?)マンガチックな映画かと思っていたが、事前に少し情報を集めてみるとどうもそうではなさそう。そして、実際に映画を観ると、その正反対の「感動モノ」……。

この映画の主演はあくまで讃岐うどんだが、そこで描かれるテーマは、①胸を打つ父と子の物語、②誰もが共感のラブ・ロマンス、③ずっと変わらない友情物語、そして、④ごく一部マンガ的コメディ、と多種多様。したがって、2時間14分という長丁場ながら全く飽きることなく、笑ったり涙したりしながらタップリとスクリーンに没頭できるはず……。

## 今ドキの若いモンは……？

この映画の主人公は、今ゴジラマツイこと松井秀喜と同じニューヨークに住むコースケマツイならぬ松井香助(ユースケ・サンタマリア)。世界的コメディアンを目指して単身ニューヨークへやってきたものの、お寒いギャグでちょっとした笑いを誘うぐらいの芸人はニューヨークにはゴマンといる。したがって、何とか仕事を見つけて働いていたものの、遂に今日はその店からもクビを宣告……。これによって、遂にニューヨークで大成功を収めて故郷へ錦を飾るという香助の壮大な夢はボシャってしまい、彼は今香川県へ失意の里帰り……？

「ここには夢なんかない、ただうどんがあるだけだ！」と叫んで家を飛び出した若者が、夢破れて故郷へ持ち帰ったのは借金だけ。そんな香助を姉の万里(鈴木京香)や同級生の中西(中野英樹)、牧野(森崎博之)、淳子(明星真由美)、そして後輩のタクシー運転手、水原(永野宗典)らは温かく迎えたが、頑固オヤジの拓富(木場勝己)はそうはいかない。「何しに帰ってきたんや」「出戻ったヤツに食わすうどんなんかない！」と一喝されたが、私から見てもこれは当然。これでは、「今ドキの若いモンは！」と言われても仕方ないはず……。

## 運命の出会いが山の中で……

人は誰でも後から振り返ってみれば、「あれが運命の出会いだった」と思うことがあるもの。香助の場合、それは万里から言われて墓参りに行った時の宮川恭子（小西真奈美）との出会いだった。香助がコメディアンを夢見ていたのなら、恭子の夢は小説家になること。しかし、そんな恭子のとりあえずの就職先は地元タウン誌の出版社。そして、彼女の仕事はしがないグルメ情報の取材……。そんな2人が山の中で出会ったのは、お互いドジなことをやった結果。そのうえ、熊に襲われるという稀有な体験を。しかし、人生何があるかわからないもの。そんな2人が山の中で迷い、飲まず食わずの状態でたどり着いたのが、畑の中にポツンと建っている1軒の民家であり、ここでありついたのが、玉子を落とし、しょうゆを少しかけ、ネギを落とした打ちたての1杯のうどん。前日熊に襲われて以来何も食べていない2人は、その味にビックリ！ この恭子との出会い、そして1杯のうどんとの出会いによって、その後の香助の人生は大きく転換することに……。

## それでも仕事はできるもの……

とりあえず親友の鈴木庄介（トータス松本）の紹介で、香助はタウン誌の出版社を紹介されたが、そこで面接したのが、編集長の大谷（升毅）、副編集長の三島（片桐仁）、そして編集部員の青木（要潤）。情報誌を1冊売れば歩合10円という条件につられて（？）就職した香助だったが、香川県は日本一人口の少ない県で100万人。したがって、10万部売れたら100万円という計算がいかにインチキかはすぐにわかりそうなものだが、それがわからないところも今ドキの若者……。もっとも、ここで香助はこのタウン誌の会社に勤めている恭子と2度目の運命の出会いをしたのだから、何がラッキーで何がアンラッキーかは簡単にわからないもの……。個性の強い（というよりケツタイな）仲間たちとサークル感覚で仕事を始めた香助だったが、勝負は企画力。ある日、ある時、あるきっかけで香助は、あの日運命的な出会いをした讃岐うどんを紹介する企画を思いついた。その企画を動かすのは「麺通団」、そしてタウン誌に連載するコラムは「うどん巡礼記」。こんな思いつき企画でも、うまく当たればモノになるもの。いやそれどころでは

なく、これがバカ当たり……。

## 「ブーム」の偉大さと軽薄さ、そしてその恐ろしさ……

マスコミがこれだけ発達し、テレビによる影響（情報操作）が絶大なものになっているニッポンでは、うまくマスコミに乗って「ブーム」になればすごいことになるのは明らか。8月3日に放映され、関西地区の平均視聴率42.9%を記録した亀田興毅 VS ファン・ランダエタの「対決」にみる亀田（三兄弟）ブームを見ても、それは明らかだ。このように「ブーム」は偉大だが、その反面、にわかボクシングファン、にわか亀田（三兄弟）ファンとなっている若い女性ファンの熱狂ぶりを見ていると、そこには軽薄さもきっちり共存……。したがって、いったん観客が飽き、その「ブーム」が去ってしまうと、どうしようもなくなってしまうという恐ろしさも……。さて、香助や麵通団がやり始めた「うどん巡礼記」は、東京のテレビ局が大々的に取りあげたため、突然一大ブームに……。本広克行監督は、そういう面白さを描くのは大得意……？ 日本列島を突然襲った讃岐うどんブームによって、それまで静かだった地方都市、讃岐のまちがどんな騒動に巻き込まれることになったか、そのフィーバーぶりをタップリと楽しもう……。

## 頑固オヤジにもスポットライトを……

この映画の表の主人公は香助と恭子だが、裏の主人公は頑固オヤジの拓富。日本が世界に誇れるものは、何ととっても各種製造業における個人の「技術」だが、この映画でスポットライトが当てられるのは、松井製麺所で黙々とおいしい讃岐うどんづくりを続けている拓富の技術。この映画を単なるコメディとせず、父と息子の感動物語としているのは、まさにこの職人氣質で頑固な父親の姿があるから……。

香助の姉の万里やその夫である良一（小日向文世）はその価値を十分認めているが、香助はそんな父親に反発したため、全く別の道を選んだはず……。しかし、讃岐うどんブームが去ったことによって、逆に自分が讃岐うどんとは切っても切れない縁があることを思い知った香助が、父親に頼もうとしたことは……？

ちょうどそんな時、今日も1人黙々と作業に励んでいた拓富は、突然倒れ込んでしまうと急性心筋梗塞であっさりあの世へ行ってしまうことに……。万里をは

じめ誰もが、「これで松井製麺所は店じまい」と思ったが……。

## さて、香助のつくる讃岐うどんは……？

万里は父親がこだわり続け、守り抜いてきた松井製麺所の讃岐うどんの味は、到底誰も受け継ぐことはできないものと決めつけていた(?)ため、店じまいと道具類の処分は既定方針……。ところがそれに異を唱え、突然「俺が跡を継ぐ」と香助が言い始めたものだから、万里はビックリ……。弁護士生活を32年間もやっている、父親が急に死亡した後、戻ってきていた長男が突然「家業を継ぐ」などと言いだせば、これは遺産相続の紛争となるのでは、とつい勘繰ってしまうが、それは一種の職業病……。この映画では、そんな法律上の問題ではなく、父親のうどんづくりの技術を息子が継承することができるかどうかの問題。そして、実際問題としてはそれはほとんど不可能に近いのだが、それではこの映画における感動的な父と息子の物語は成立しない。したがって、多少無理筋でも、何とかうまくいかせなければ……。さて、本広監督は、そんなテーマをどんな風にスクリーン上に実現……。そしてまた、仮に頑固オヤジがつくる讃岐うどんの味を継承できた場合、その後香助は一体どうするの……？

## 恋愛模様の描き方はちょっと甘い……。？

この映画には、口説き文句も恋の告白も全く登場しないが、何となく自然に「いい仲」になるのが香助と恭子。タウン誌をつくる会社内や「麺通団」の仲間内でワイワイやっていく中で、2人が仲良くなっていくのはごく自然だが、ちょっと描き方が甘いのではと思ったのは、讃岐うどんブームが去り、香助の父親拓富が死亡した後の恭子の行動……。すなわち、拓富の死亡に伴う香助の突然の変身ぶりの中、いつの間にか恭子は影のように香助に寄り添い(?)、甲斐甲斐しくエプロンをかけて、香助の讃岐うどんづくりを手伝っているが、それって少しヘンでは……。ああいうキャラ(?)の恭子だからあまり深く考えず、成り行きのままに香助を手伝っているのかと思わないでもないが、やはりそうではないはず……。さてそうになると、仮に香助が頑固オヤジの味を継承できた場合、恭子は一体どんな行動を……？

2006(平成18)年8月7日記